

無門関研究會(第五回)

九月十六日皇學研究所にて開催。来會者下記、今村保言、坂井春大、後藤由夫、石川佑二、大野勇、所健一、佐々井謙、山本昇(八氏)。八名集まつたが研究所マあるアパートの六畳間が一杯になつた。二時から四時まで公案の研究、七時まで質問座談

(第十一則 州勘庵主) 趙州が「庵主の所(行つて向ふた)有るかなく」庵主は拳を立てて示した。州は「水が浅くて船ま泊められぬ」と云つて去つた。また一庵主に到つて向ふた。有るかなく。その庵主もまた拳を立てた。州は「縦横無尽、殺活自在」と云つて礼をした。

同じように對して示したのに、趙州は何故一方さ肯かひ、一方さ肯かほぬのか。優劣は何処にあるか。この事をはつきり道心得たならば趙州の心境が何のこたわりもない自由自在なものであることが判るだらう。州が二庵主の心を見破つた(勘破)と云つても、同時に二庵主から趙州が見破られてゐるのだ。若し二庵主に優劣があると答へたら、また本当の禪ではない。優劣なしと云つても禪ではない。

趙州の眼は流星、氣鋒は利手電、彼の言葉は殺活自在(以上公案大意)
二庵主の禪的力量の優劣を論じたら、戯論である。それは趙州が會つた庵主で、自分が直接會つたわけではなからた。向題は二庵主を識別勘破した趙州の眼を、その氣鋒(機)を捕へることにある。度々云ふ必叙は判断力である。無字に参することはその判断力を鍊磨することである。汝みづからを斬ることを得るなら、初めて他を斬ることが出来る。

汝みづからを斬ることを得るのには、叙れ又がなほ為めである。汝みづからを斬る叙れ又を斬るの法は、そのまゝに用ひて他を、念を断つて、正気と、経路を断つて、斬るの法である。一糸の大根を斬る法は、千万本の大根を斬る法である。斬らぬる対象は大根一人子であり、一糸も千万本も美差はない。自他を斬るものと云

と氣鋒は氣鋒あり、
解

無門関

皇田義

(my Lord)

正
東
当
の

芭蕉はこれに
呼んで杖杖と
云うた。

百廿四の叙と云ふ、すなはち神叙であり佛智叙である。

(第十二則 巖喚主人) 瑞巖の彦和尚は毎日みづから主人と喚び、みづから「ハイと答へた。それから自分に向つて言つた。眼を醒ましてみるが、はいく。人に瞞まされるなよ」はいく。瑞巖の老人はみづから賣つたり買つたり、色々様々な自己の姿を現はす、一体何故か、喚んだり答へたり、眼を覚したり、瞞されなかつたり。その一つくは虜はれたらいけない。また瑞巖の真似をしたら野狐禪である。 求道者が眞実を掴めないのは従前の自分の考へか人向の考へたと思ふからである。これが無量劫末の生死流転すなはち迷ひの正体である。ところが世の痴人はその迷ひの本を本末の自分自身だと思つて及指すること知らぬ(以上公案大意)

主人と喚ぶからには、それは自分を生かして居る根源のもの、父母未生以前の宇宙の父母である。「我が主イエス」と云ふ主であり、人向イエスから云ふなら「天に在します我等が父」である。「I am that I am」(吾神とは神自己を言ひしむる者なり)とモーセが云ふ初めの「I」である。主人公は僕に向ひ、父は子に向つて常に「慳吝者」と戒め屬かし、方り指導して居られる。「慈眼視衆生」の実体が「觀世音菩薩」である。此の世の中に頼りたへべきものは皆無であるが、このみづからの主人公のみが柱とも杖とも頼み得る唯一のものである。「念佛のみぞ末はとりたるまことにせありける」とまこと親鸞鳥が云ひ通りである。だがこの主人公は他に在るのではない。自分自身である。

従前の識神とは又有懶惰淨化されなままの従末の自己の意志見解である。宗派神道ではこれを憑依靈、守護神と云ふ。自己の中に多数多種蠢いてゐるその守護神が何を考へ何を爲してゐるか、その行く先は何なるか、何時自分に湧いた思いがさ一つく徹底的に調べ上げて行くことが「無字」の提提である。反省と懺悔なく、すなはち自覚なく、その守護神をコントロールすることが出来ず、逆に引ずり廻はされる状態が迷ひである。従前の識神の名を偏見、自惚れ、恐怖、怠慢、怯情、卑屈、惑溺等々と云ふ。簡略してこれを(貪、瞋、痴)と云ふ。(依れ心)

吾すなはち神としか我すなはち自己と有らざる者あり

先天は即ち空相であり、
後天は即ち空相であり、
空相も即ち空相であり、
空相も即ち空相であり、
空相も即ち空相あり

舎は一応天(先天)に還へつたにてもよい。然し他人の矛盾を斬つて場合、それに解
決を与へることが出来ず、法が立たなければ日蓮の云ふ禪天魔である、と云つてもこ
れもまた禪の初歩的な一面であるから、必ずしも間違ひといは云へない。

たが佛教典に接すると、^{その}般若の説法は懇切丁寧な極はめてある。まことに「我もまた
世の父(弄童)である。趙州だつたら如何なる処置を取つたかは判らないが、ここに
趙州と南泉の禪風の相違を見なければならぬ。そして此の相違を知ることが世界経緯
の上に於ける天照大御神の皇道と須佐之男命の王道、神道の相違を理解する端緒ともな
る。日本の道と所謂ユダヤの道、すなはち伊勢系の神道と出雲系の神道とは同じ河國
洛書に立脚するものであるが、その用ひ方によつて殺活の道が岐れるのである。

(第七回) 十一月十八日、出帝者石川佑三、後藤武夫、所健一。

(第十五 洞山三頓) 雲門の所へ洞山が来た。何処へ行つて来たかと向ふたとこ
ろ、山はこれくゝの場所へ行きて、これくゝの日に冥処を去つたと答へた。雲門は云つ
た「馬廐め、六十棒(三頓)を喰らはすところだ」。翌日の曉方洞山が再び雲門の所に
に来て訊ねた、「昨日六十棒を喰はすとお叱りを頂きましたが、一体私の何処に過ちが
あるのでしょうか」。門は言つた「この殺演し、江西や湖南までうろついて来て何
に成る」。洞山は大悟した。……雲門は初め洞山にかいは(馬糧)を与へて及倉
の道を南いた。洞山は一晩中迷ひ抜いた揚句、夜明けを待って再び法を向いに来たの
で雲門はどの蒙を叩いた。たが洞山が直下に悟つたとしても余り伶俐とは云へない。
(前日の三頓の注意が付くべきである)。扱て諸君に向ふが洞山は三頓棒を喰ら
ふべきものが、喰らふべからざるものが、喰らふべしと云ふなら、大凡誰も彼もが棒
喝に通ずる。喰らふべからずと云ふなら雲門の言つたことはたゞのことである。これが
判つたら洞山と同じ心になる。……獅子がその子を教ふるに崖下に落し、自力で
登つて来りて居る。前日の前は軽く、翌日の前は深い。(以上公案大意)

本も若も云はる。

この飯を以て

て空に還つた

若しくは
空界の性函の道ある
と物人の道ある

禮の雲水行脚は觀光遊山ではない。若し東京部の一灯園に居た時、大和路を批鉢
行脚したいと申出たら、この春の日に大和廻りなどして何に在ると當番の三上和志氏
に叱られたことを今でも忘れぬ。第三文明会は物ほしけな亡者集めの宗教營業では
ない。暫らく天澤白蘭の経論と神道布麻道の概論を説いて人向性の自覚と世界解決
の道の体得を促すが、話りを聞くだけで依然として惰眠を續ける者は本佛師の會員
ではない。所謂シンパであらう。座下からみづから跳ね上つて来て身まいて大業に参与
する者が眞の同志である。第三文明会に本當の御子兒が三人揃へば世界の維新は成就
する。この三人を参劔と云ふ。

(第十六 鐘声七條) 雲門が言つた。世界はこの様に広々としてゐる。何故か前
達は鐘の音を聞くと七條の袈裟を着るのか。……およそ参禪修業は人の声に追従し
事物の変化に引擦られることと嫌ふ。たとへ言聲を聞いて道を悟り、事物を覺て心が
明かになるとも凡庸である。僧達はみづから進んでその声に駕(騎)り、事象の変化
を吞込んで、事の上にも心の上にも自由自在であることを知らぬ。まことにその通り
であるのだが一念廻しよう。声は耳許に来るものか、耳が声の所へ行くものか。た
とへ禪定三昧に入つて響寂共に忘れるとも、それだけではこの向の消息の解決は付か
ぬ。若し耳を以て声を聞かば悟り難い。眼で見る所に声を聞いて初めて眞實に接得
る。……悟れば万事皆一つ、悟らなければ千差万別。悟らなければ万事皆一つ、
悟れば千差万別。(以上公案大意)

佛自作

人間は神の子、佛の子、宇宙の愛子であつて自主自律独立独行して人類獨特の文
明を創造する尊嚴なる小宇宙である。神道はこれと神漏岐の道と云ふ。禪はこの道
の備である。斎時を知らせる鐘声を聞いて習慣の慣性でフタクと袈裟を身に着けた
ら禪ではない。文字や言葉で道を知ることと声聞と云ふ。事象に従つて悟る者と縁覺
と云ふが、それではまた本當ではない。声を聞き事象に接したらその上に直ちに自主
性を發揮して事物人心に對して道を実現実行して行くことが本来の人の道である。

に入る内

みづからが袈裟深くは悟るはんのである

天産主義は強権を以て人間主義と云ふ監獄の囚人にしてノルマの勞役を課する。資本主義は人間を牧場の牛馬羊豚とする、本人はのんびりと青草や唐黍を食つてゐるつもりであるが、結局は肉を食はれ毛を剥ぎ取られる。世界を二分するこの権力に対して「否」と叫ぶ第三の愛護が起ち上る時である。

「声」が耳許に来るが、耳が声の所へ行くと云ふのは近代の物理学がなかつた宋代の話しであるが、音と色に就て生命の主体側に把握された原律が五十音并斗麻匠の特に父親の原理である。度々説く如くヒアノ自体に音はなく、虹自体に色はない。その振動が鼓膜を通じて聞かれ、紅緑の色彩となる物の音色や色彩は実は人間生命の

本與先天の知性によつて創造されるものがある。また人の言葉を聴く時は、その言葉を自己の知性まで再生するのである。この事を神道で「岐美二神の神」と云ふ。

「人間の知性がなければ宇宙は無音であり暗黒である。『生命は人の光りなり』(ヨハネ伝)と云はれる通りである。ここに万物森羅万象の造物者としての神自体、佛自体としての本来の人間、收養二神の自主性がある。この自主性が神道の神漏岐高御産靈の道である。

この公算をいま一歩進めて近代科学の上へ行くと云ふならば、科学的宇宙像が何処から如何にして生ずるかと云ふ問題である。科学はそれに関与してゐる認識の主体面を捨象し、映像だけを追つてゐる。映像を映像たらしめてゐる者の存在を忘れてゐる。物理学が浮き身をやつしてゐる誤差の問題に就ても、星辰の運行電子の廻転に誤差はない。誤差は必ず知性を運営して計算認識する主体側から生じる。その主体側の人間性能の全局を呈示し、誤差を審判する道が神道并斗麻匠である。全世界の物理学者生物学者と日本の并斗麻匠学者が無まつて此の問題を協議する学術会議を「天の宮(セツカサリ)」と云ふ。

此の生命の自主自律性を会得すればすべての文明現象は同一唯一の人類知性一

切智、一切種智の所産であるから、万事が自己の掌中、葉籠中のものである。然し会得しなければ夫々の環境に引きずり舞はされて千差万別、応接に暇がない。その自主自律性を会得しなければ、毎日同じ時向に同じ電車に乗つて出勤するサラリーマンの平凡な同一事の繰返してゐる。会得すれば利那マの事象のすべてが常に最初の日の如く「(we are eastern Tag) 新らしい生き」とした生命の創造であつて、宇宙に同一事実と云ふものは二度とは起らないことが判る。(無門閑庵文を参照されよ)

るが、即ちこのコソ、パンと云ふ立自となり

望遠鏡をのぞく自色の眼の活動と性化を云ふのである。

ciagnislig
天の宮